

相木の谷の縄文時代中期土器について

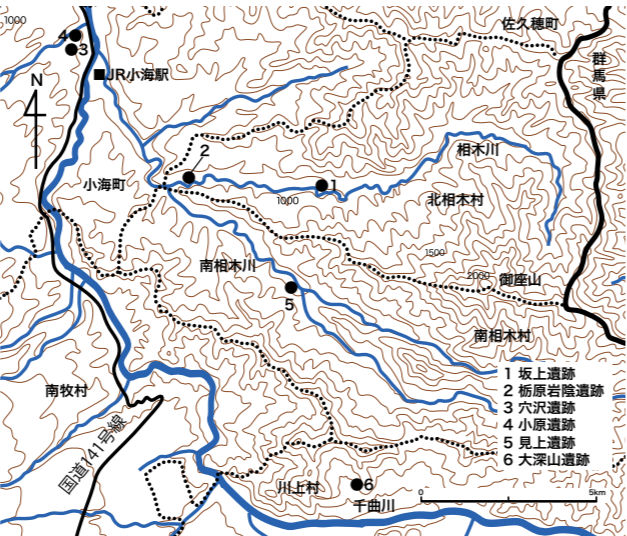
藤森 英二

はじめに

言うまでもなく、長野県内では縄文時代、中でも中期の遺跡が多い。それゆえ土器の編年研究についての蓄積もあり、1960年代の所謂「井戸尻編年」（藤森他1965）で骨組みが示されて以降、「昭和40年代は井戸尻編年の提示と問題の提起、50年代は資料の増加にともなう編年上の若干の修正、60年代前後からは方法論的修正をとともなう再整の時代」とまとめられている（三上1999）。そして現在は、その細分や地域ごとの変遷を整えつつ、俯瞰的な位置付けを進めるながら地域間交流を考える段階でもある（三上・藤森2012、綿田2013a）。

北相木村を含む東信地域でも、中期中葉の焼町式や、後葉の郷土式を軸とした独自の編年が組まれ（寺内2004、綿田2008、藤森2013等）、現在ではそれらの地域間交流に論が及ぼうとしている（寺内2012、綿田2013b、水沢2014等）が、さらに地域を絞り現在の南佐久郡、すなわち千曲川最上流域を見ると、古くは八幡一郎の研究（八幡1929）や島田恵子による論述はあるものの（島田1998）、今日的な視点でその実態に迫った考察は少ない。筆者は過去に、北相木村において発掘調査により得られた坂上遺跡の資料を用いて、その前半期における土器編年の予察を試み（藤森2006）、またその後南相木村見上遺跡出土の中期後葉から末期の土器を報告する機会にも恵まれた（南相木村教育委員会2016）。

本論では、未だ不完全ではあるものの、相木の谷を中心に千曲川最上流域の土器を俯瞰してみたい。



第1図 遺跡位置図

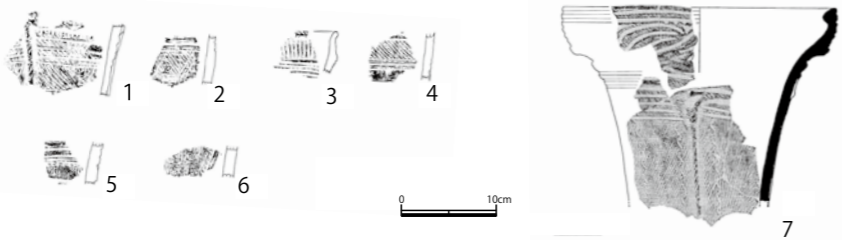
1. 中期前葉

(第2図)

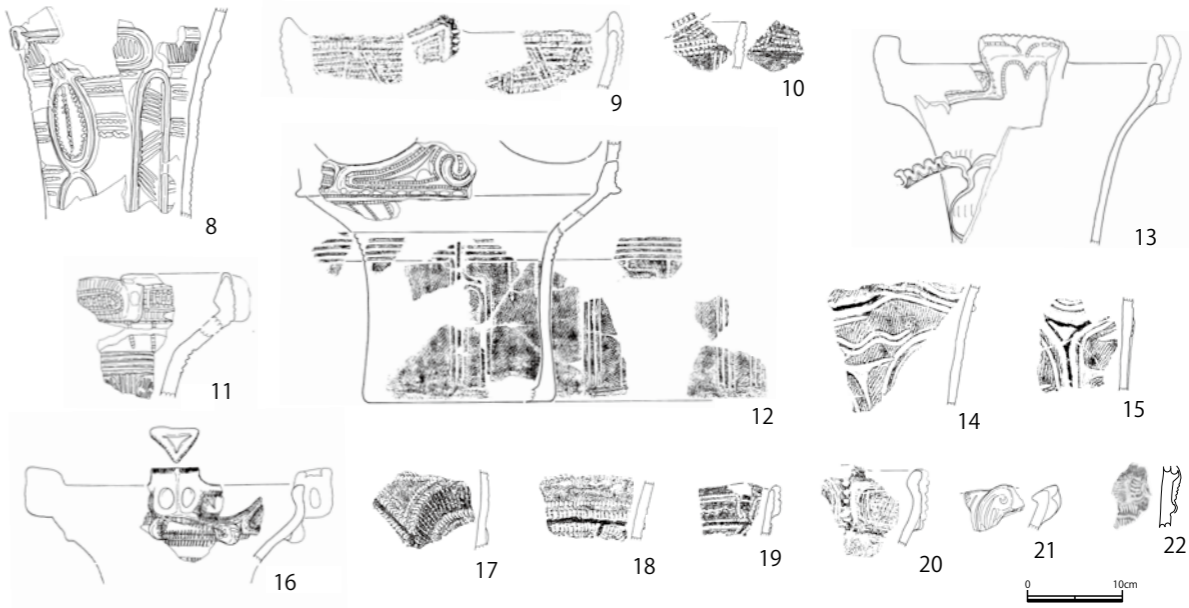
関東の編年では五領ヶ台式、井戸尻編年では九兵衛尾根式期に該当する。この時期の土器としては、坂上遺跡から小破片が、栃原岩陰遺跡の1983年調査区からは、大型の破片が出土している。

資料番号1～6は坂上遺跡出土の資料。1は五領ヶ台Ⅱ式、2～4は半隆起線文が見られ、寺内が東信系土器とするもの、あるいはその前段階のものとなしたい。5・6は半隆起線文の脇には刺尖があり、北信地域に多い深沢式であろう。7は栃原岩陰遺跡の資料。図上復元が可能で、五領ヶ台Ⅱ式といえよう。

またこの時期では、八ヶ岳東麓に位置する小海町の穴沢遺跡や小原遺跡で良好な資料が出土している。中でも穴沢遺跡はこの時期単独の遺跡で、復元可能な個体も多い。



第2図 中期前葉土器 (S=1/8)



第3図 中期中葉土器 (S=1/8)

これらも含め、半隆起線文を用いたもの（東信系土器かこれに先行する土器）が多く、これらに五領ヶ台式や深沢式が混在するという状況である。

2. 中期中葉

(第3図)

所謂勝坂式、あるいは井戸尻編年で言う貉沢、新道、藤内、井戸尻式の各期に相当する。

北相木村内では、坂上遺跡の発掘調査では図上復元可能な土器も含めて一定量が、栃原岩陰遺跡でごく少量が出土している。

8～21は坂上遺跡のもので、8は「東信地域で成立した」（寺内2004）とされる後沖式土器である。これに対し9、10は貉沢式である。いずれも角押文が見られ、この期の特徴を示している。また、勝坂・井戸尻系土器と千曲川流域の土器との折衷と思われる土器（11・12）もある。器形や口縁部文様帯の構成は貉沢式の範疇であるが、横位に並行する半隆起線以下の胴部は、縄文地文で角押文と半隆起線によるクランク状モチーフが底部にまで伸びている。これは、千曲川の中流域から北陸地方の土器に見られるものを思わせる。

また坂上遺跡では、阿玉台Ⅰb式土器も出土している（13）。これについては、井出による詳しい考察がある（井出2018）。

やや時期が下ると、焼町式古段階（14、15）も見られるが、数量的には16のような新道式・藤内Ⅰ式が多数見られる。17は所謂抽象文の一部。18、19はやや新しいと思われる。また阿玉台Ⅱ式（20）も少数ながらみられる。

藤内Ⅱ式から井戸尻式になると、坂上遺跡では出土

数が極端に減るが、やはり勝坂・井戸尻系土器が多いと思われる。焼町式は、破片が1点認められたのみである（21）。栃原岩陰遺跡でも、この時期の小破片が数点出土している（22）。

3. 中期後葉

(第4図)

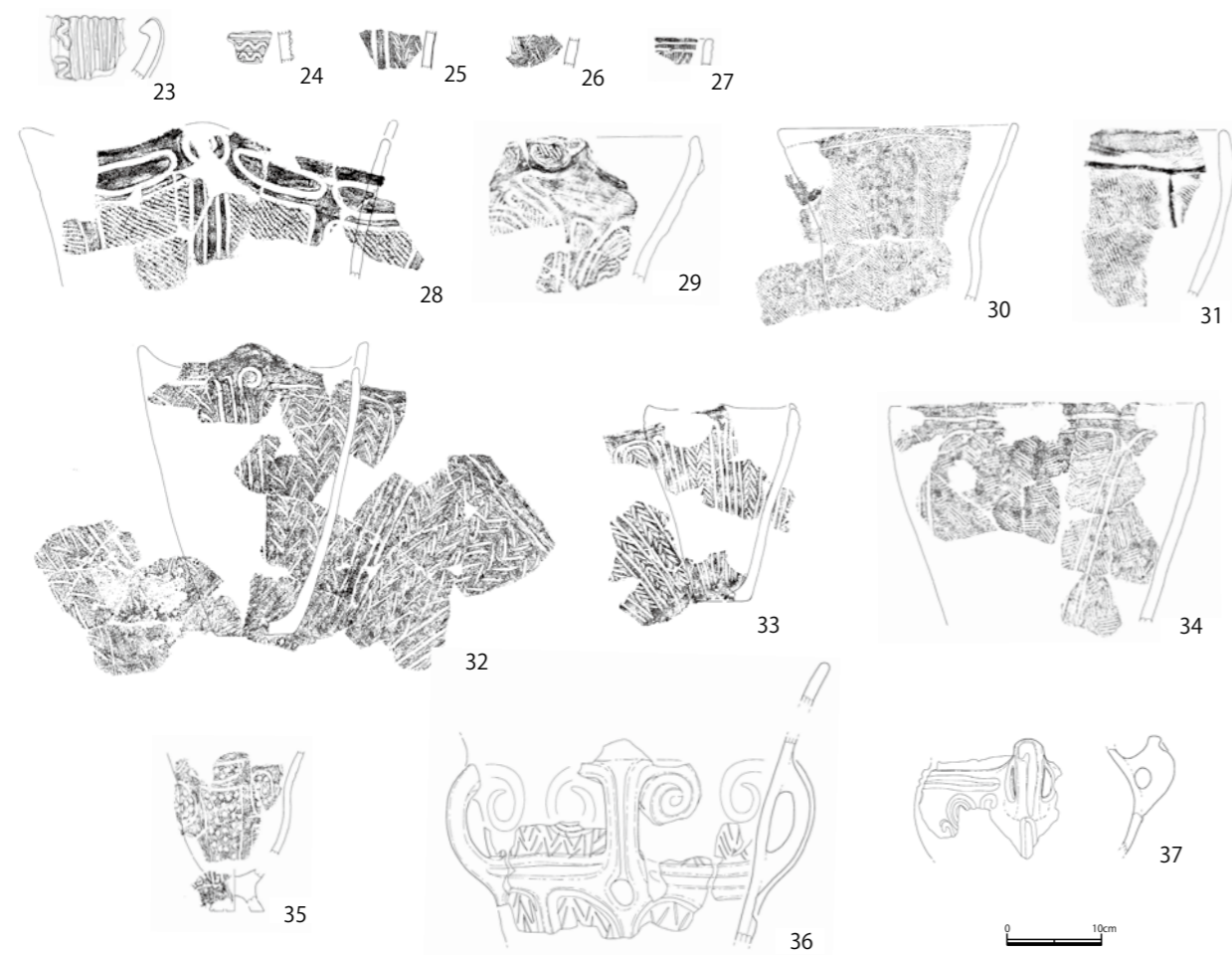
長野県内では、最も遺跡の多くなる時期であるが、現在のところ北相木村内で遺物の発見数は少ない。坂上遺跡での発掘調査でもわずかな土器片が出土したに過ぎない。23は後葉初めの梨久保B式、24は曾利Ⅱ式であろう。25、26は後半期の曾利Ⅲ～Ⅳ式。27は関東南部を中心に分布する連弧文土器の口縁である。

尚、坂上遺跡では、胴部が一周する唐草文系土器の樽型の深鉢（埋甕とも考えられる）や、後葉期の釣手土器の釣手部なども見られ（本誌11頁参照）、今後の調査如何では、さらなる発見はあるかと思われる。

中葉後半から末にかんしては、2012年に南相木村の見上遺跡が発掘調査され、ややまとまった土器群が出土した（南相木村教育委員会2016）。28は関東地方の加曾利Ⅲ式、29はやや東北の大木式の影響もあろうか。30、31は同Ⅳ式であろう。

一方、32～34は山梨方面に多い曾利Ⅴ式。35は器台をもつ土器である。時期の特定は難しいが、中期末としておきたい。

36、37は取手を有する資料で、器形の差異はあるが、いずれも曾利Ⅳ～Ⅴ式と言えるだろう。



第4図 中期後葉土器 (S=1/8)

4. 他地域との関係

以上、今一度概要をまとめると、中期前葉では、五領ヶ台式と東信系、深沢式が混雑する状況。これは現在のところ、東信地域全体を包んだ千曲川上流域全体の傾向と言える。

中葉になると、やはり千曲川流域もしくは東信地域に見られる後沖式土器や焼町式といった、曲隆線文が主体の土器が含まれるものの、山梨や南信地域あるいは埼玉、群馬両県西部からの影響だろうか、貉沢式以降、新道、藤内、井戸尻（もしくは勝坂式）の諸型式が見られ、数において拮抗、あるいは上回っており、勝坂・井戸尻系土器がより主体性を持って存在したと思われる。また井出が指摘するように、群馬県西部との繋がりが強い阿玉台1b式が認められる。

尚、焼町式とその前段階に関しては、北陸や関東地方との関連を考える必要もある（山口2008、長澤2018等）。

後葉期についても、山梨方面の曽利式、もしくは関東地方の加曽利E式が主体的で、浅間山麓に多い郷土式が色濃く分布する佐久平（旧白田町）以北とは違った様相を持つことが予想される。また1点のみである

が、関東南部に分布する連弧文土器も認められた。さらに上流の川上村大深山遺跡では、従来言われている通り曽利式が多く（島田1998）、より山梨方面との繋がりが強いと思われる。

以上のように、本地域では東信地域独自の土器も見られつつも、旧白田町以北や浅間山山麓とは異なり、より関東や山梨方面との繋がりが強いことが予想されるのである。

おわりに

駆け足で該当時期の土器を追ったが、紙面の関係もあり、提示できた資料も少なく記述も簡略的である。それぞれの詳細は、調査報告書や参考文献を参照されたい。

また北相木村では、今回あげた発掘資料以外に、坂上遺跡や宮ノ平遺跡、カワト沢遺跡で多量の採集品もあり、いずれ改めて資料化しながら、この時期の肉付けをしていきたい。叶うならば、若い研究者に未発表資料の発表を担ってもらい、共に地域の研究に貢献したいところである。

主な参考文献

- 井出浩正 2018「旅する縄文土器」『北相木村考古博物館報』Vol.1
- 北相木村教育委員会 1984『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書-昭和58年度-』
- 北相木村教育委員会 2003『坂上遺跡』
- 桜井秀雄 2012「東信地域における縄文時代中期の様相」『長野県考古学会誌』143・144合併号
- 島田恵子 1998「第四章 縄文時代」『南佐久郡誌』考古編
- 寺内隆夫 2004a「千曲川流域の縄文時代中期中葉の土器「焼町土器」および北関東地域との関係を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』120集
- 寺内隆夫 2004b「千曲川流域における火焰型土器および曲隆線文の系譜」『火炎土器の研究』新潟県立歴史博物館
- 寺内隆夫 2012「土器装飾にみる差異の顕在化と中期文化の繁栄」『長野県考古学会誌』143・144合併号
- 長澤展生 2018「火焰型・王冠型土器出現前夜の様相-五丁歩式土器設定の試み-」『津南学叢書』第35輯 津南町教育委員会
- 藤森栄一編 1965『井戸尻』中央公論美術出版
- 藤森英二 2006「北相木村坂上遺跡の縄文時代中期

中葉土器」『長野県考古学会』114号

藤森英二 2013「東信地域における縄文時代中期土器の動態」『文化の十字路 信州』日本考古学協会

三上徹也 1999「中部地方中期（貉沢式～井戸尻式）」『縄文時代10 縄文時代研究100年』

三上徹也・藤森英二 2012「長野・山梨両県の中期土器編年について-現状と課題-」『長野県考古学会誌』143・144合併号

水沢教子 2014『縄文社会における土器の移動と交流』（株）雄山閣

南相木村教育委員会 2016『見上遺跡』

八幡一郎 1929『南佐久郡の考古學的調査』

山口逸弘 2008「新巻・焼町系土器」『総覧縄文土器』小林達雄監修（株）アム・プロモーション

綿田弘実 2008「郷土式・圧痕隆帯文・大木系土器」『総覧縄文土器』小林達雄監修（株）アム・プロモーション

綿田弘実 2013a「長野県における縄文時代中期土器群の分布状況」『文化の十字路 信州』日本考古学協会

綿田弘実 2013b「長野県北東部における縄文中期後葉土器群 千曲川上・下流域の地域差・唐草文系土器との交流」『第26回縄文セミナー 縄文中期中葉土器研究の現状と課題』

北相木村考古学ニュース

つりてどき 坂上遺跡の釣手土器

これまで未発表だった、坂上遺跡で発見された釣手土器を紹介します。

北相木村坂上・中尾地区の坂上遺跡は、これまでも縄文時代の遺物が数多く発見されていますが、実はその中に「釣手土器」と呼ばれるものの破片があります。これはお椀のような形状の上に、大きな複数の窓を持った特殊な土器で、縄文時代のランプという説もあります。

坂上遺跡の例は、発見の経緯は不明ですが、釣手土器の天井部分と思われ、大きな窓が3つ空いた形をしていたとようです。内側には焦げた跡があり、確かにランプのような使い方も想像されます。縄文時代中期後半、およそ5000年前のものでしょう。

